

論文

宇野千代編集の雑誌『スタイル』に見る洋装と和装 —第2巻第1号（1937年1月号）から第2巻第12号（1937年12月号）まで—

Aspects of Western-style Clothes and Traditional Japanese Clothes as Seen in the Magazine
“SUTAIRU” Edited by Uno Chiyo
— Vol. 2, No. 1 (January 1937) to Vol. 2, No. 12 (December 1937)—

松尾 量子
Ryoko Matsuo

This paper examines the Western and Japanese clothing found in the second volume (1937) of the magazine "SUTAIRU" edited by Uno Chiyo, and confirms that the magazine proposed a new beauty for active young women. In the pages of Western-style clothing, the magazine advocated a mode that celebrated the youthfulness and active beauty of young, energetic women. The page on kimono shows various aspects of kimono of the time, which were based on traditional kimono culture and transformed to fit the increasingly modern urban space.

I. はじめに

昭和戦前期の雑誌『スタイル』は、1936（昭和11）年6月に、小説家宇野千代によって、欧米のお洒落な生活をグラビアで伝える雑誌として創刊され、誌面を変容させながら、1941（昭和16）年9月まで刊行された。創刊号は、宇野が社長を務めるスタイル社から発行されたが、第3号（1936年8月号）からは時事新報社の発行となる。しかし、1936（昭和11）年12月に『時事新報』は『東京日日新聞』に併合されることになり、『スタイル』の発行は第2巻第1号（1937年1月号）から、スタイル社に戻る。宇野はこのことについて「創刊号以来、蔭になり日向になりこの雑誌の成長を援けて下さった時事新報社から新年号を期してはなばなく独立することになった¹⁾」と記しているが、当時編集部²⁾に在籍していた松井直樹は、後に、『スタイル』は廃刊になるところを、宇野の『スタイル』への愛着によって存続したと述べている。そして、好きで集まった素人たちが雑誌出版の苦勞を味わいながら「素人だ素人だといいいながら、次第に玄人になってきたようだった。好きで始めた仕事は強かったのだろう。儲からないからといって、止められないのである」と回想している³⁾。宇野自身、第2巻第2号の編輯後記において、「こんな可愛い、よく売れる雑誌を継

子みたいに、つれて行かれますか。やっぱり私の手許で、大事に育てます。」と記している⁴⁾。この宇野の言葉の通り、独立後の『スタイル』は、大幅に頁を増やし、誌面を充実させてゆく。

本稿では第2巻第1号（1937年1月号）から第2巻第12号（1937年12月号）までの『スタイル』に見られる洋装と和装を検証する。資料は、臨川書店による復刻版『スタイル』（2003年）を用いた。資料の引用に際しては、原則として仮名遣いは原文のままとし、旧漢字は現在の形に改めた。また、表記の読み取りができないものについては「○」を記した。

II. 「楽しい総合雑誌」としての『スタイル』

創刊初期の『スタイル』は、毎号のように誌面を変化させ、海外のファッション情報に加え、洋装や和装、住居や食など生活全般に関わる写真や記事、小説や随筆などを掲載したお洒落な生活を提唱する雑誌としての編集方針を確立して行く⁵⁾。第2巻以降の『スタイル』は、第1巻において確立したグラビアを中心としたお洒落雑誌としての方向性を維持しつつ、編集方針を巧みに変化させる。第2巻第1号までの『スタイル』は、巻頭にグラビア頁が置かれていたが、第2巻第2号からは、グラビアは巻頭ではなく17頁以降に配置される。さらに第1巻第7

号がグラビア頁と活版頁を合わせて48頁であったのに対して、第2巻では活版頁が増量され、第1号は72頁、第2号、第3号は64頁、第4号以降は72頁となる。小説や随筆に加え、「お洒落コント」や「アベック問答」など手軽に読める読物頁が増やされることで、グラビア主体のファッション情報を伝える頁を維持しながら、「誰でもが手軽に手に取れるジャンティなお洒落雑誌⁶⁾」となっていく。第2巻第3号の編集後記に、宇野は以下のように記している。

「愉しい総合雑誌」ある日、こんな肩書きを考えました。——軍部と政党がどうなってもスペイン内乱がいつまで続いても、せめてそんなイザコザの一行も書いていない雑誌が一冊位あっても好いんじゃないでせうか？⁷⁾

1937（昭和12）年7月に日中戦争が始まった後、『スタイル』の誌面にはじめて戦争が現れたのは、第2巻第9号の谷長二による「スマートエコノミイ」だとされる⁸⁾。これは輸入規制に伴う国産品の向上の必要性を述べたものである。第2巻第10号には、編集部の大原芳郎の出征記念会の写真が掲載されており、編集後記には、大原が新たに2着の軍服を新調し、由緒ある軍刀を捜しまわったエピソードが紹介され、「まことの伊達者とは魂の理知性を意味する、と詩人ボードレールも言っていました⁹⁾が、お洒落こそは、一糸乱れざるそのエスプリの心構えを涵養することで、事に当たって動ぜざる風情こそお洒落道の極意です。」と述べられている。翌月号の「お洒落コント」のテーマは「恋人出征」であり、編集後記にはユナイト社の映画『1938年のヴォーグ』が輸入禁止になるかもしれないと記されるなど、わずかながら、『スタイル』の誌面に戦時下であることを読みとることができる。しかし、ファッションや服飾に関する頁では、引き続き海外のファッション動向が意識され、『1938年のヴォーグ』を第11号のグラビア頁に集録するなど、海外ファッション情報を伝えるお洒落雑誌としての編集が続けられた。

Ⅲ. 洋装頁とグラビア

1) 洋装頁におけるグラビアの役割

第2巻の『スタイル』は、第1巻と較べると、活

版頁が増量されると共にグラビア頁が減少し、1号あたり20頁から24頁程度となる。グラビア頁の半分以上が洋装に割り当てられ、第1巻第7号（1936年12月号）の編輯後記に記された、グラビア頁の半分以上を洋装、残りの半分を和装、その残りを男ものと化粧などに割り当てるという考え方が継承されている。

洋装頁は、女優や歌手をモデルとして撮影された特写と海外からのファッション写真、お洒落のポイントを写真やイラストで紹介する「FINE POINTS」、読者モデルの写真による「Snapshot」などのグラビア頁と流行や洋装に関する記事やエッセーからなっており、グラビアを見て楽しみながら、ファッションについての情報や洋装に関する知識を得ることができる構成になっている。洋装記事やエッセーの執筆者には、山脇敏子や今和次郎などが含まれており、その内容は、表層的に服飾流行を紹介するというものではなく、専門的な視点からお洒落な装いを論じるものであった。

洋装頁の最初に掲載されるグラビアは、スタイル編集部の推薦する衣装を着用したモデルを撮影した特写である。第1巻では、広幅手織り銘仙を使ったイブニングドレスなど、実験的ともいえるものが多く、第1巻第7号の編輯後記に、「従来、ともすれば『雰囲気』ばかりの弊があった前半グラビア面¹¹⁾」と記されていたが、第2巻では、外出用のコートやアフタヌーン・ドレスなど、読者が実際に着用する可能性の高いアイテムが多くなっている。表1に示すように、24枚の特写には、それぞれキャプションが付けられているが、そのうち15枚にモデルが着用する装いのデザインや仕立の担当者、素材の提供等についての記載を確認することができる。

2) 第2巻第2号に掲載された2枚の特写

第2巻第2号のグラビア頁の最初に掲載されたのは、赤坂の水町洋装店によるスワガー・コート（図1）で、次のような説明がついている。

アーリー・スプリングに相応しい黒いマーテンカのふくよかなスワガー。高いネックと、袖口で絞ったやうにゆたかなスリーブ。ちょっとブロードテルのやうな味ひと艶やかさのスワガーです。モデルはフロリダの美しい園尾美子さん。¹²⁾

スワガーは、1930年代に流行した角張った肩と背



図1 園尾美子(図版引用 復刻版『スタイル』第2巻第2号17頁)

面のフレアーを特徴とする、裾広がりのゆったりした7分丈のコートで、『スタイル』第1巻第5号で杉野芳子が美しいウエストラインの持ち主が少ない日本人の体型に合うと推奨している服飾アイテムである¹³⁾。第2巻第5号の「質問箱」には、衿とカフスがついた紺のスワガーとスカートのアンサンブルが野暮ったいのでスマートにする工夫はないかという読者の質問が掲載されており、スワガーは、読者にとって実用性の高いアイテムであったことがわかる。モデルを務める園尾美子は、第2巻第1号の「マドモアゼルの着付け」で「日頃着物を着なれない、澁漉としたお嬢様のための着付け」¹⁴⁾のモデルと同一人物である。

第2巻第2号のもう一枚の特写は、女優の岡田嘉子をモデルとした写真である(図2)。この写真には「まひるの夢のきゆうびすむ あなたの瞳のぬれたいろ あなたのほづぶもねぐりいぢえ 芝生にしろい雲の翳」というキャプションが付けられている。この写真は、かなりの無理を押しつけて撮影されたようであるが、イメージ通りの仕上がりとなり、衣装デザイン担当者でもある編集部の松井直樹は「岡田嘉子さま。あの時にご無理を申し上げてたいへん失礼



図2 岡田嘉子(図版引用 復刻版『スタイル』第2巻第2号、32-33頁)

いたしました。お蔭さまで社内一同暫しボウ然とする程の傑作が出来、鼻タカダカの態です。有難うございました。」と記している¹⁶⁾。第2巻第2号の編集後記には以下のように記されている。

本号の特写は、どれもスタイル社ゴジマンのもの。どの写真もちゃんと一つのテーマをもってゐて、ドレスによって、構成的なセット考案の苦心の跡のあるのをみていただきたい。モードのデザインを間に合はせの背景に立たせて、カメラを向けるなんぞのいい加減なことはもうユルサレナイ。次々とユニックなコンポジションをご覧に入れるつもり¹⁷⁾

洋装の普及に伴い、婦人雑誌には洋装や洋裁に関する記事が掲載され、特集が組まれるようになっていたが、製図や作り方など実用的な内容が主であった。『婦人画報』の別冊として刊行されていた『スタイル・ブック』や『洋裁クラブ』には、スタイル画と共にモデルを使った写真が掲載されていたが、『スタイル』の特写は、第2巻第2号の編集後記にあるように、単に服のデザインを示すのではなく、写真としてのテーマをもって撮影されており、当時としては先駆的であった。一方で、第2巻第7号の

水ノ江瀧子の写真のように、ファッション写真というよりモデルの魅力を示す要素が強い写真が掲載されることもあった。この傾向は、『スタイル』が「楽しい総合雑誌」である上で必然であった。

3) 新しい美しさの提案

表1に示すように洋装の特写のモデルの多くは女優であるが、『スタイル』第2巻には、17歳の青山君子をモデルとした特写が3枚掲載されている。第2巻第5号に掲載されているのは、松井直樹のデザインによる赤いサッシュをしめたワンピースの上に肩の張った花柄の短いボレロを羽織って椅子に座った写真である。2着目は第2巻第11号に掲載された大きな三角形の衿がついたアフタヌーン・スーツである(図3)。デザインは松井直樹、キャプションは以下のとおりである。

広い三角の襟 四角い帽子 狭いベルト 浅いグローブ 短目のスカート プレインなパンプス。線條のエコノミイがこのアフタヌーン・スーツのキイポイントです。黒いタフタの衿とカウス。赤い交織シルクウールの上衣のボディス。袖とスカーツは黒です。アクセソリイも黒です。¹⁸⁾

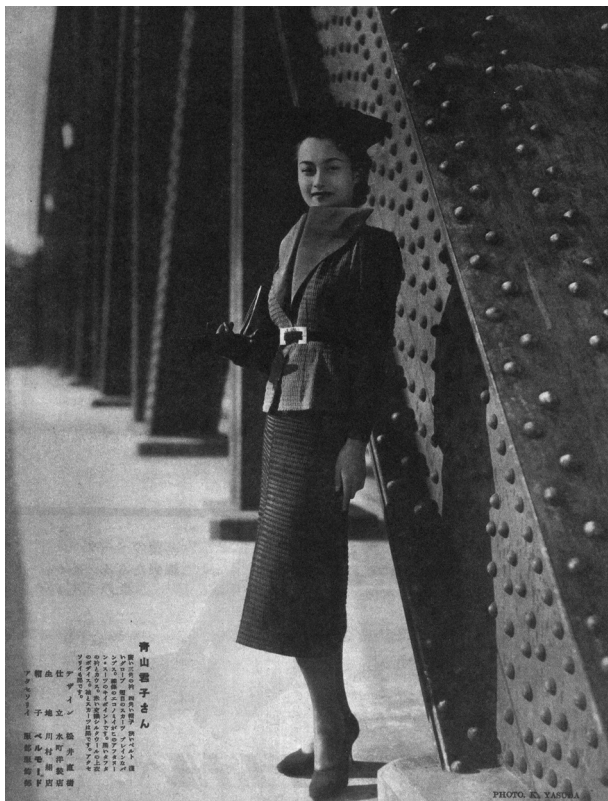


図3 青山君子(図版引用 復刻版『スタイル』第2巻第11号、17頁)



図4 青山君子(図版引用 復刻版『スタイル』第2巻第12号、17頁)

アフタヌーン・スーツの細身のシルエットは、大きな三角形の衿、材質感の異なる交織シルクウールとタフタの組合せ、赤と黒という色彩によって強調されている。そして鉄橋を背景とすることによって、対比的にモデルの若い身体の美しさと強さが強調されている。

第2巻第12号にはチェック柄のコート(図4)が掲載されており、キャプションでは、以下のようにモデルについて言及されている。

君子さんは17歳、身長五尺四寸五分。なぜこんなことを書く必要があるのでせう。こんなに高いウエスト・ラインをもったひとがあるでせうか。若き"新しいバランス"これを理解していただきたいのです。このコートを作った手代木さんは、すでに九月号スタイルでお馴染みの美しいお嬢さまですが、恰も、どちらが高いかわからなくもないくらい、同じように揃って、伸び伸びとヴィヴィッドなひとです。このコートに与えた"あたらしいバランス"の解釈をごらんください。この二つの若く美しい"新しいバランス"のコンビがこの写真のテーマなのです。"新しいバランス"とは、新しい線、若い時代とお考え下さっても結構です。¹⁹⁾

「伸び伸びとヴィヴィッドな人」と形容されている青山君子についての詳細は不明であるが、コート²⁰⁾の作者である手代木幸子と共に、『スタイル』が求める新しい「美しい人」の代表であると思われる。第2巻第2号の編集後記には、「若い女の人たちの間に『美しい人』の増えたのに驚く。これまでのハンコで押した様な『美人』なんか犬に喰われて了えだ。動く美人、あなたひとりしかゐない美人、そういう美人はみんな若い人だ。スタイルの売れる所謂だ。」²¹⁾と記されている。青山が着こなしている大きいチェック柄のコートやアフタヌーン・スーツは、「新しいバランス」をもつ活動的な若い女性のためのデザインであり、新しい美しさを提示するものである。

4) スタイル洋装部の新設と「STYLE PATTERN」

第2巻第7号の編集後記には、「銀座を歩いて、行きづりに、このひとは——と、つい振り返りたくなるほどの綺麗な洋装は、きまって、お嬢さまよりも少し年をめしたひとの中になるのはふしぎである。お嬢さまは、みんな若くて美しいけれど、好みに、はっきり自分を見つけ難いのかもしれぬ。」²²⁾と記されている。当時の衣服の調達方法は、自家製あるいは洋裁技術を持つ人に頼んで作ってもらう、洋装店等で仕立てるかであった。『スタイル』には、他の服飾雑誌や婦人雑誌とは異なり、型紙など洋装や洋裁に関する実用的な内容は掲載されていない。読者からの質問に答える「質問箱」には服作りや素材についての質問を確認することができる。第2巻第4号の「質問箱」には、『スタイル』に掲載されている外国女優のドレスを作りたいので型紙を作ってもらえないかという質問があり、編集部



図5 STYLE PATTERN (図版引用 復刻版『スタイル』第2巻第12号、26-27頁)

は、出来るだけの便宜は図るが、写真をもとにしての裁断となるため、価格は普通の型紙よりは高くなると回答している。このような要望は他にもあったようで、第2巻第10号の編集後記には、以下のように読者のための「スタイル洋装部」の新設が発表されている。

長い間の懸案だったスタイル洋装部を新設しました。『貴女だけのデザイン』をお作りしてスタイル風の新しいモードを提供したいと思います。御希望の方はどうぞ御利用下さい。²⁴⁾

この「スタイル風の新しいモード」は、『スタイル』が読者層の中心に置く若く洗練とした女性のためのデザインであると思われる。第2巻第12号からは、洋装グラビア頁にスタイル画による「STYLE PATTERN」(図5)が設けられている。スタイル画に添えられた説明文には、「裾までの二つの直線がこの型を細身にみせます。衿からウエストラインまでで留めた高い釦の位置もいよいよ背を高くみせるでせう」²⁵⁾といったデザイン上のポイントが記されている。これは、1930年代後半の細身のシルエットを反映したもので、青山君子が着るコートのキャプションに示された「新しいバランス」「新しい線」に象徴される「スタイル風の新しいモード」を具体的に提案するものである。

IV. 和装頁とグラビア

1) 芸妓の写真

第1巻第3号の伊東深水のインタビュー「深水に夏ものを訊く」に柳橋の榮美子の写真が2枚掲載されて以降、第5巻第8号までの『スタイル』には毎号、芸妓の写真が掲載されている。高橋春子は、1910年頃から芸妓を社会の表面にめだたせることをさける風潮が進行し、1920年代末には新聞や雑誌に芸妓や花柳界の記事が掲載されることがなくなり、結果的に、芸妓は庶民には手の届かない特別な存在となり、その装いの基準は一時代ずれたところにおかれたとして、「『スタイル』が紹介する東京の一流の芸妓たちは、着装においてはあまりに上手すぎて、芸者風のくずれ方をみせても、それがすでに様式化し、冷たい印象になっているとさえいえる」²⁶⁾と述べている。『スタイル』の編集後記には、モデルとなった芸妓について「金茶小紋に枝梅を抜



図6 新橋久辰中 お蔦（図版引用 復刻版『スタイル』第2巻第2号、48頁）

いたキモノといい、結び文模様、木賊色の下着とい
い寸分の間もない新橋風である」²⁷⁾「とても今日で
は探せない純新橋調のキレイなひと」²⁸⁾、のような
記載が見られる。第2巻第2号の新橋久辰中のお蔦
の写真（図6）に添えられている「窓のそとは梅の
花でも咲いてゐさうな。千金の春宵もお蔦さんひと
りのためにあるやうな。この姿、この色香、春信え
がく昭和版の浮世絵です。」²⁹⁾という文章は、芸妓
の艶姿の基準が、高橋が言うように、一時代前の過
去に置かれていることを示している。このお蔦の写
真は、圧倒的な人気だったようで、次の人選が難航
し、第2巻第3号には柳橋の榮美子が再登場してい
る。『スタイル』に掲載された芸妓の写真は、モデ
ルが一流の芸妓であったことに加えて、撮影者も当
時人気の写真家で、他では見ることのできない写真
であり、『スタイル』の人気を高め、購買層を広げ
る役割を担っていたと思われる。

2) 宇野千代の「新しいきもの」

『スタイル』は、海外のファッション情報をグラ
ビアで伝える雑誌としてスタートしたが、第3号か
らの和装頁の責任担当は宇野千代であり、和装は洋
装と共に『スタイル』の主要なコンテンツであっ

た。宇野は『スタイル』誌上において、従来の和服
の常識に囚われない楽しんで着る自由な「新しいき
もの」を提唱し、その具現化を試みている。宇野の
「新しいきもの」については拙稿³⁰⁾において論じた
が、ここでは『スタイル』第2巻における和装とい
う観点から再検討を行いたい。第2巻第3号には、
断髪の若い女性のための、現代化した元禄調の着物
「モダン元禄調」（図7）が発表されている。これ
は試作段階のものであったが、第4号の質問箱には
読者からモデルの髪をセット美容院や布地の入手先
についてあの問合せが掲載されており、読者の側
に、「新しいきもの」を受け入れようとする状況が
あったことがわかる³¹⁾。第2巻には、「新しいセル
のキモノ」「新しいキモノとマネキン」（第2巻第
4号）、「新しい木綿の単衣地」（第2巻第6号）
、「自由なキモノ」（第2巻第7号）といった宇野に
よるきものに関する文章が掲載されている。第2巻
第2号の「下駄の古典調」では、古着あさりの趣味
を覚え、明治時代の古裂を探し出すことに熱中して
いることが述べられており、第2巻第7号の「古



図7 モダン元禄調（図版引用 復刻版『スタイル』第2巻第3号 39頁）

着アサリの面白さ」には、遠目には無地に見える男物のお召しを見つけ、渋い派手さが顔を浮かび上がらせるという感覚を見出したことが記されている。³³⁾ 第2巻第11号の「-もしも若い-お嬢さんだったら」は、若い女性に向けたメッセージの形式で、男物の古着を自分用に縫い直して着てみたときの発見が以下のように記されている。

女物は派手なもの、男物は地味なもの、画然と決まりをつけて了つてゐるのは、日本の着物の習慣ですが、必ずしもそれを守らなくてはならないとも限りません。洋服では平気で、黒だの紺だの無地の布地、細かい縞、ちょうど日本の小紋のやうな細かいプリント模様などが使はれてゐますでせう、あの傳で、思ひ切つて無地物だの細かい柄のものを女物に仕立てて見ると、これまでの女の着物には観られなかつた、或る新鮮な美しさを発見して、びつくりして了ふんです。全く信じられないくらい逆効果で、地味な着物であればあるほど、顔が着物の中から浮かんでゐる感じで、それは美しく見えるのです。³⁴⁾

「新しいきもの」は、既存のきもの概念に縛られることなく、自由に着ることを楽しみ、新しい美しさを見出すというもので、「スタイル風の新しいモード」の和装ヴァージョンであると言えるが、第2巻第7号に掲載された「モダン元禄調」(図7)は、試作段階のもので、その具現化には、着物に対する深い理解と経験に基づく鋭い感性が必要であった。この意味において、一時代前に完成された様式美としての芸妓の装いは、きもの文化の一つの規範として機能したと考えられる。

3) 『スタイル』に見る1937年の和装

第2巻の『スタイル』には、芸妓以外をモデルとした和装写真の特写が3枚掲載されている。第6号の宮川静子(図8)、第7号の吾妻春枝、第12号の細川ちか子(図9)である。宮川静子は深川の鰻屋「宮川」の娘で、第1巻第2号に、『スタイル』に掲載された最初の和装写真として、静子の姿を見ることができる。第2巻第6号の静子の写真には、次の文章が添えられている。

五月雨煙ぶる午後のお庭先の一ときです。紺地



図8 宮川静子 (図版引用 復刻版『スタイル』第2巻第6号、56頁)

の金紗に白い井桁模様のお着物、焦茶に渋い格子の八反帯、藤紫の粋な襟、銀杏返しの水々しさは、流石に深川娘の代表のお姿です、棕櫚繩の樋を伝う雨だれをちっと見詰めて何を懐っているのでせう。³⁵⁾

当時都市部では若い女性は日常的に洋装であり和装は特別なものであることが多く、第2巻第1号には、和装に慣れていない若い女性のためのお正月向けの「マドモアゼルの着付」が掲載されているが、静子の場合は、和装が日常である。第2巻第7号の早見君子の「半襟の表情」には、静子の半襟について、「よくふだん着調を出してゐます。此の場合お襟が白く出てやゝ細めであれば、若さと可憐さを合わせて出します。然し此の方はお胸をせまく見せるためにも、此の程度の出しかたが結構とおもひます。³⁶⁾」と評されている。静子の装いは深川の『宮川』という特別な場を前提とするものであるが、第7号の舞踊家吾妻春枝の踊りの衣裳を着けた姿もまた、日本舞踊の舞台における装いである。これに対して、第12号の女優細川ちか子の和装は、自宅のサンルームで撮影されており、キャプションは以下の通りである。

ご新居のサンルームです。壁にうつった軒の影、午後の陽ざしの和やかさ。鳥籠の中の小鳥は何でしょう。ちか子さまの深いお眼の色に、私たちに新しい人生があります。お召物は黄八丈、洗い朱の帯においた渋い金泊の、この人知れぬ豪華さ。³⁷⁾

黄八丈は、伝統的な手法で時間をかけて染め上げられ、織り上げられたもので、粋な着物として愛好されていた。第2巻第3号には、「春の流行の粋“黄八丈“として黄八丈が「本年の代表色”黄色”の流行に乗って素晴らしい勢いで流行して参りました！昔ながらの植物染料で染め上げました黄の鮮やかさ、古いものの中から蘇って来る色調の近代性——感触爽やかな令嬢向きのお召物として敢えて御推薦申し上げます」という白木屋の広告が掲載されている。細川ちか子の和装は、観葉植物が置かれたサンルームという、伝統的な日本家屋とは異なるモダンなガラス張りの空間に不思議にマッチしている。第2巻第7号の編輯後記には、特写撮影の苦勞として、「大川端へ出てみても、遠くで電信柱が飛び出したり、お座敷の縁先から、とたんにビルディングのガラス窓が覗いてあたり、どこにも、ガラスとコンクリートのナヤミ。³⁹⁾」と近代化が進む東京の風景の現状があげられている。細川ちか子の和装は、このような街の風景にもなじむものである。

第2巻第8号、第9号には和装グラビアとして「帯の個性」という特集が生まれ、芸者、近代令嬢、優しい日本嬢、舞踊、一般婦人の帯結びがグラビアで紹介されている。それぞれの写真には解説がつけられており、芸者については、当時の通常の形式の芸者の「おたいこ」と昔ながらの芸者の基本的な結び方である「やなぎ」が紹介されている。近代的な若い女性の帯結びについては、提灯箱を背負ったような締方が紹介されており、「はやりはじめの頃は変に見えたりしましたが、今ではだんだん大へんによくなってきました。豪勢な近代風に建物を背景とした若いお嬢さま方の、新しい生活には、帯の締方にも、これくらゐの誇張があった方がよく調和いたませう。」⁴⁰⁾と記されており、近代化に合わせるように、和装の美が変容していることが示されている。



図9 細川ちか子（図版引用 復刻版『スタイル』第2巻第12号、45頁）

V. 『スタイル』第2巻における洋装と和装

『スタイル』第2巻は、日中戦争勃発後も、お洒落な雑誌として刊行が続けられた。洋装頁では、創刊以来のグラビアを中心とした構成が維持されており、見て楽しみながら、最新のファッション情報やお洒落に関する知識を深めることができるものであった。特写は、読者に『スタイル』が推奨する装いを具体的に提案するものであるが、背景やセットなどを吟味して撮影されていた。第1巻の洋装特写の衣装はイブニングドレスなどが主であったが、第2巻では外出用のコートやスーツなど、読者にとって現実性の高いアイテムが多くなる。また、都市に住む若い女性のための「スタイル風のモード」を通して、新しい美しさが提案されている。第2巻第11号、第12号に掲載された青山君子をモデルとして撮影された特写は、「新しいバランス」「新しい線」の具体的な現れであり、若さと活動的な美しさを讚美するものであった。第2巻第9号の谷長二に「スマートエコノミイ」では、女性の装いについても「一つの日本のスタイルを作りたい⁴¹⁾」と述べられているが、「スタイル風の新しいモード」は、1930年代後半の海外のファッション動向に沿うものであった。

和装頁では、第1巻に引きつづき、第2巻においても芸妓の写真の掲載が続けられる。芸妓は、当時の多くの人にとって手の届かない特別な存在であり、『スタイル』に掲載された一流写真家による一流の芸妓の写真は、様式化された伝統的な和装の美を提示するものであると同時に、観る者にファンタジーを届けるものでもあり、『スタイル』の読者層を広げ、「楽しい総合雑誌」としての側面を強化する役割を担っていた。宇野千代が『スタイル』誌上において提唱した「新しいきもの」は、伝統的な和装の規範に縛られることのないものであったが、その具現化には、着物に対する深い理解と経験に基づく鋭い感性が必要であった。『スタイル』第2巻の和装頁には、伝統的なきもの文化に基づく和装と近代化が進む都市空間に合わせて変容する和装の諸相を確認することができた。

『スタイル』第2巻では、洋装、和装ともに若い活動的な女性に向けた新しい美が提案された。それは日中戦争が始まった後も戦時下であることを感じさせることのない「楽しい総合雑誌」としての『スタイル』の編集方針の表れであったと推察できる。

(本稿は2023年度山口県立大学研究創作活動助成の採択を受けて行った成果をまとめたものである。)

表1 『スタイル』第2巻における洋装特写

巻号	モデル	撮影者	制作者等
第2巻第1号	霧立のぼる (新興キネマ)	名越辰雄	デザイン：松井直樹 仕立：ロンモ洋装店 布地：ストック商会 帽子：ベルモード婦人帽子店
	江戸川蘭子	—	仕立：クローバ洋裁店 布地：ミラテス
第2巻第2号	園尾美子 (フロリダ)	—	仕立：赤坂 水町洋装店 布地：新宿 本間商店 帽子：銀座 オリエンタル
	岡田嘉子	名越辰雄	デザイン：松井直樹 生地・仕立：ストック商会 靴：銀座 ヨシノヤ
第2巻第3号	古川登美 (新興キネマ)	S.Takagi	仕立：山脇敏子 生地：銀座 羊屋 帽子：銀座 ベルモード婦人帽子店 バッグ：銀座 服部時計店
	ナンシー (ブラックバード)	名越辰雄	
第2巻第4号	神田千鶴子 (P・C・L)	名越辰雄	仕立：伊澤やよひ 布地：銀座 カネボウ 帽子：銀座 オリエンタル婦人帽子店
	桑野通子 (松竹大船)	安河内スタジオ	生地仕立：銀座 ストック商会 バッグ：銀座 服部時計店
	摩耶まりゑ (日活)	福田勝治	
第2巻第5号	青山君子	名越辰雄	デザイン：松井直樹 仕立：赤坂 水町洋装店 布地：銀座 オーキ 帽子：銀座 ベルモード
	高野由美 (新興)	YASUKOCHI	靴：ヨシノヤ靴店婦人部 ストッキング：アンコール佐々木営業部
第2巻第6号	高峰三枝子 (松竹大船)	YASUKOCHI	仕立：山脇敏子 布地：銀座 ストック 帽子：調布 マグノリア
第2巻第7号	水ノ江瀧子	福田勝治	
	入江たか子	名越辰雄	
第2巻第8号	桑野通子 (大船)	福田勝治	仕立：北村静江 布地：ストック商会
	摩耶まりゑ	福田勝治	
第2巻第9号	天草みどり (松竹少女歌劇)	福田勝治	
	手代木幸子	名越辰雄	
第2巻第10号	竹久千恵子 (P・C・L)	K.YASUDA	仕立：山脇敏子 布地：オーキ
	エリコ	K.YASUDA	デザイン：松井直樹 仕立：水野葉子 布地：ストック
第2巻第11号	青山君子	K.YASUDA	デザイン：松井直樹 仕立：水町洋装店 生地：川村絹店 帽子：ベルモード アクセサリイ：服部服飾部
	渡邊はま子	福田勝治	
第2巻第12号	青山君子	名越辰雄	仕立：手代木幸子 生地：ストック商会 帽子：ベルモード婦人帽子店
	原節子 (P・C・L)	K.YASUDA	

- 1) 『スタイル』第2巻第1号、p.44。
- 2) 松井直樹(1901-1963)は『スタイル』第1巻第7号から編集部に加わり、洋装を担当すると共に、表紙画やグラフィック面で活躍した。
- 3) 松井直樹「日本の服飾雑誌1」、『カラーデザイナー』第2巻第8号、1956年、P.10。
- 4) 『スタイル』第2巻第2号、p.64。
- 5) 松尾量子「宇野千代編集の雑誌『スタイル』に関する一考察-初期の誌面の変化を中心に-」『山口県立大学学術情報』第14号(国際文化学部紀要 通巻27号)2021年、pp.95-104。
- 6) 『スタイル』第3巻第1号、p.80。
- 7) 『スタイル』第2巻第3号、p.64。
- 8) 井竿富雄「雑誌『スタイル』と初期日中戦争、一九三六—一九三八」、『山口県立大学学術情報』第16号(国際文化学部紀要通巻第29号)2023年、p.3。
- 9) 『スタイル』第2巻第10号、p.72。
- 10) 『スタイル』第2巻第11号、p.72。
- 11) 『スタイル』第1巻第7号、p.
- 12) 『スタイル』第2巻第2号、p.17。
- 13) 『スタイル』第1巻第5号(1936年10月号)には杉野芳子による3種類のスワガー・コートデザインとその製図、説明文が掲載されている。
- 14) 『スタイル』第2巻第5号、p.68。
- 15) 『スタイル』第2巻第1号、p.
- 16) 『スタイル』第2巻第2号、p.72。
- 17) 『スタイル』第2巻第2号、p.72。
- 18) 『スタイル』第2巻第11号、p.17。
- 19) 『スタイル』第2巻第12号、p.17。
- 20) 手代木幸子は第2巻第9号に掲載されたストライプ柄のタフタ地のストリート・ブロックのモデルとして登場している。
- 21) 『スタイル』第2巻第2号、p.72。
- 22) 『スタイル』第2巻第7号、p.72。
- 23) 『スタイル』第2巻第4号、p.68。
- 24) 『スタイル』第2巻第10号、p.72。
- 25) 『スタイル』第2巻第12号、p.26。
- 26) 高橋晴子『近代日本の身装文化「身体と装い」の文化変容』、三元社、2006年、pp.412-414。
- 27) 『スタイル』第2巻第4号、p.72。
- 28) 『スタイル』第2巻第7号、p.72。
- 29) 『スタイル』第2巻第2号、p.48。
- 30) 宇野千代の「新しいきもの」については、以下の拙著において検証した。「雑誌『スタイル』に見る宇野千代の「新しいきもの」」、『山口県立大学学術情報』第16号(国際文化学部紀要 通巻298号)2023年、pp.165-175。
- 31) 『スタイル』第2巻第4号、p.66。
- 32) 宇野千代「下駄の古典調」、『スタイル』第2巻第2号、p.90。
- 33) 宇野千代「古着あさりの面白さ」、『スタイル』第2巻第7号、p.46。
- 34) 宇野千代「-もしも若い-お嬢さんだったら」、『スタイル』第2巻第11号、p.66
- 35) 『スタイル』第2巻第6号
- 36) 早見君子「半襟の表情」、『スタイル』第2巻第7号、p.41。
- 37) 『スタイル』第2巻第12号、p.45。
- 38) 「スタイル」第2巻第3号、p.39。
- 39) 『スタイル』第2巻第7号、p.72。
- 40) 早見君子「帯の個性 近代令嬢の結方」、『スタイル』第2巻第8号、p.48。
- 41) 『スタイル』第2巻第9号、pp.30-31。